揉烏帽子考

完

イ 4
2478
103

門 1 4
號 2478
卷 103

奥州白川郡史
拜越中守源
定信朝臣御添
削

京都帝國大學圖書之印

揉烏帽子考

伊勢貞丈先生云古代は袴と者とも云る風俗なる所軍陣の時のみと云へども白衣少て袴と着候事なるべし事ふるきに大將と侍と禁庭なるもの少しも人も貴人なれども對し又私にても君臣將卒の禮と正すべき事なれども甲冑の下に揉烏帽子殿直童と着候是禮と失さる人へ為つるもの也しかるに近代故實と好る人も先ずしみ思ひ殿直童の古制なと尋ねしる元來甲冑の制衣なりて遠い揉烏帽子を羅精好の類にて作り殿直童も錦繡指布と以て作りいはもも是霜を注てもの爲に損し堅く其中奥此物廢しる故に當世に殘きる

東京帝國大學圖書之印

物希ふ〳〵適新井白石翁の軍器考ふ図説を著〳〵或
壷井鶴翁の傳書等のごとき其余韜鈐家の雜説つまびらか
論ずるふ〳〵にて別ちめみるべし乃制衣ごとき猶更實説ごとく
既に鶴翁の傳書に詳なりしも其制衣り拙のふ伝えるごとき乃
家蔵なりと云事なりかなるべきん歟然まこと唯真丈先生乃
様烏帽子書といへる汲古乃據ごとき外なかりしを已に
享和第二乃夏讃州高松の幸ふ古制衣のものみるべきと
見ることを得たり此ごとき〳〵のものを平氏一乃名代構の大手
生田の森の一ノ木戸を固る真部五郎助光の後裔讃州
山田の郡木太乃郷の城主たり〳〵真部五郎祐重の甲冑ふ

添〳〵世々持傳へ侍りしごとき様烏帽子ある事を知るべしもあり
袋のごとき物有て愚に示次人あり倩こまごまと乃ふ
彼袋の上下破れ失せしもとも十ふて八九を殘し其形
徴とすべふ足ふ殊小真丈先生の考ふし引用せる所の近江國
東迎寺の宝物十界の図しみるべし〳〵能符合〳〵深色古
源平盛衰記頼朝卿宣衡対面の条ふ云古黄色佐渋塗の立烏
帽子に白直垂と有〳〵とあるふ能似るもの誠ふ疑ふ〳〵古制衣乃
様烏帽子ある事と知る依而右真部氏家蔵の様烏帽子
ごとき十界の図と並へ挙〳〵猶博覧の君子の訂正ふ備る事
左のごとく

十界之図

第十巻ノ中

生別人道之内

出陣ノ躰ナリ

貞丈云北ヱホシスキトホリテ見ユ羅又ハ精好ナトノ如キモノニテ製シタル物ト見ヱタリ

貞丈云十界図元三十幅也其内四聖之図十五幅ハ元亀之乱ニ比叡山ニテ焼失ス六道ノ図十五幅ハ今ニ傳テ近江國坂本村來迎寺ニ有之圓融院ノ御代惠心僧都往生要集ヲ撰テ叡覧ニ備シカハ御感ノ餘ニ其書ノ事相ヲ繪ニ寫シ女御后妃ノ爲ニスベキ旨画工ニ命セラレ僧都ノ指南ヲ受テ図画セリトヱ其図賢ハ即僧都ノ筆也繪ハ巨勢金岡トヱ傳タレ𪜈金岡ニテハ時代相違也

真部五部祐重傳來揉烏帽子押し形

註文

一此烏帽子羅ニシテ物ノスキ通ルヲ當世ノ越後縮ノ如シトスレ𪜈經緯𪜈獸毛ヲ以テ織タル物ト見エ享ヲ奈良晒ナトニ類ス殊ニ地合コハキ物ハ兜下ニ九時ハタヽミ兜ヲ脱スル時引立ニ便リスルモノカ

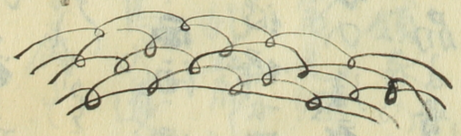
一染色柳ノ類尤袋形ニ織タル物故左右ニ縫目モナシ織ヤウモ亦奇ナルモノ也或云此ヱホシ織タルヤウナレ𪜈實ハ袋形ニアミヨワル物ニテ甚奇品

ナリト云

一 頂キノ取損タル故九キカ鋭リタルカ分明ナラス又緑ノ分モ損シタレハ
イカヤウ有シ物ニヤ是亦考ヘカタシ惜ムヘキフニヤ

以上

奥羽會津ノ處士芙田善次郎江都ニ於テ元徴ニ詣テ曰此揉烏帽子ノ殘缺ヲ柳営奥御右筆取詰屋代太郎弘賢奇品ナリトテ大ニ賞美シ即顕微鏡ヲ以テ此織リヤウヲ觀ルニ此図ノ如ク精密ニ編タルモノ也ト云也



ナリトニ

一 頂キノ取損タル故九キカ銹リタルカ分明ナラス又緑ノ分モ損シタレハ
イカヤウ有シ物ニヤ是亦考フカタシ惜ムヘキフニヤ

以上

奥羽會津ノ處士芙田善次郎江都ニ
於テ元徴ニ詣テ白此揉烏帽子ノ殘缺ヲ
柳営奥御右筆取詰屋代太郎弘賢
奇品ナリトテ大ニ賞美シ即顕微鏡ヲ
以テ此織リヤウヲ観ルニ此図ノ如ク精密ニ
編タルモノ也ト云也

ナリト云

一 頂キノ取損タル故尤キカ銃リタルカ分明ナラス又緑ノ分モ損シタレハ
イカヤウ有シ物ニヤ是亦考フヘカラシ惜ムヘキフニヤ

以上

奥羽會津ノ處士芙田善次郎江都ニ
於テ元徴ニ詣テ白此摺烏帽子ノ殘缺ヲ
柳営奥御右筆取詰屋代太郎弘賢
奇品ナリトテ大ニ賞美シ即顯微鏡ヲ
以テ此織リヤウヲ觀ルニ此図ノ如ク精密ニ
編タルモノ也ト云也

右二図に参考して揉烏帽子の古制を研窮せんものか
なん扨且右の記次平氏の属たる真部助光の後裔本朋の
遺まほ本由も他日彼家譜に搜索詳らかに今按ずるに
寿永乃乱に
安徳帝本朋を為て海に入るさ黒木の御所に留せらるる
まてを平家の婦女嬰児も多く引具せられたる後鳥羽の
戦ひに利なく平氏の運命傾くと察して西海に漂泊
なる折から本列の仁司なると頼みを為て彼婦女嬰児と
唐泊の浦或は乃生浦なとに残せり史平氏の後裔今る
本朋に遺まほ者あるを真部助光の後裔本朋に遺れる

此部類なるに拠て恵仁年間小野を細川貴領家の四臣
香川元明肥前守香西元資備後守奈良元安太宰左衛門安富元綱民部浦
本朋と為ち未地に移り須真部助光の後裔真部左衛祐重も
香西家に属し山田郡本たの仁と食邑として弓馬の道と嗜み
殊に刀術を名ある故に主幾の戦に香西家に属して忠も
戦功と顕し首供養とも為せり祐重に程小四人子孫真部と云ふ子孫落ストと云
香西成資に南海通記に見へたる芸れて当世
帝都に我玉藻の國の住まる真部家蔵に遺まほ
本朋の住事と見へ侍りめ

享和三年癸亥初冬下旬於東武礫川藩邸書之

讃州高府　　蘆澤平馬元徵

元徵先生より來翰文謨ノ中

真鍋家ニ所蔵ス　先年案山先生ニ見セ処
朝鮮製ニ毛巾ヲ引合セ見ルニ中ニ右毛巾ノ
制度ノ及ブ所アラス　李朝ニモ往古ハ如此精密ニ制衣
在ル由ニテ大ニ感心被致候下署

天保四年巳季夏寫之　　孝賢

葵烏帽子之考是迄精密成者
無之處真部氏之真物被依候
二付隨分明撥御尤之次第ニテ古
實相違之事モ勿論不相見候御
出來被成候旨御評判有之候御
好ニ付其旨識之候

文化元甲子年三月　　白川家臣
濱川堤
源萩風

享和三年癸亥初冬下旬於東武礫川藩邸書之

讀劔高府　　蘆澤平馬元徵

葵烏帽子之考是迫精密成者無之處真部氏之真物被依候二付隨分明撥御尤之次第ニテ古實相違之事モ勿論不相見申御出來被成候旨御評判有之候御好ニ付其旨識之候

文化元甲子年三月　　白川家臣濱川堤源萩風

菱烏帽子考ノ草稿ヲ以テ伊勢貞春先生ノ訂正ノ冀ケルニ先生右ノ草稿ヲ熟覧有テ菱烏帽子ノ奇品ナルヲ深感賞シ且考證モ宜ナレモ猶上古ノ菱烏帽子ニ絹布ヲ用ヒタル證據ニ加ヘシトテ建保職人哥合烏帽子師ノ図畫ヲ示サルヽヲ臨寫シテ卷尾ニ加ヘ置クモノナラン

享和三年 癸亥仲冬上旬 芦澤元徴 印

我法の為ぬ絹といふ事思ひ寄らぬ事の有るかな